

< 記念講演 >

素晴らしい日本側の原典—戦史叢書『蘭印攻略作戦』

ペトラ・フルーン (Prof.Dr. Petra Groen)

太平洋戦争はオランダに大きな衝撃をもたらした。それは東南アジアにおけるオランダの植民地統治の終わりの始まりであり、また、その後、インドネシアの島々で 10 年間続くことになる戦争の始まりでもあった。多くのオランダ人や、ヨーロッパ人との混血の人々にとって、この戦争は人生の重大な転機となり、その影響を被った誰もがそれぞれなりに体験を消化すべく努力した。また、多くが、オランダ領東インド軍が 1942 年に、何故それほど早々と負けることになったのかという疑問への答えを求めて研究に取り組んだが、ほとんどの西洋の研究者と同じく、日本語がよくわからず、日本語の原資料を調査できないため、多くの場合行き詰まった。歴史研究者で、オランダの東インド出身者コミュニティの有力な世論形成者でもあるヘルマン・ブッセマーケル (Herman Bussemaker) が嘆いたように、「オランダの若手歴史研究者の一人でも二人でもいいから、日本語のいかなる原資料も訳せるようになってくれるのを心から願」った<sup>1</sup>。そして、ついにウィレム・レメリンク (Willem Rammelink) とそのチームがその願いを現実に変えた。こうして「戦史叢書」のなかの、オランダ領東インドへの日本陸軍攻略作戦を記述した巻の翻訳を目にしているのである。

ここでこの膨大な数の巻からなる叢書が刊行されたいきさつを詳細に説明することは控えるが、手短かにいえば、これは、上位から下位までの作戦命令・報告、戦後の手記、戦後に元軍人らから得られた史料、元軍人らの解釈による資料など、戦時期の軍関係の原資料をもとに編纂されたものである。研究者が使うあらゆる原典と同様に、原典となるものは厳密に評価されねばならないが、例えば、タラカン近郊やチャテル峠での捕虜の処刑など日本軍の過度な蛮行については、本書では一言も触れられていないことには気づく。

それでも、「戦史叢書」のこの巻は、このテーマに関心のある西洋人、特にオランダ人には関心の的となるものが多く、まるで幕が上がったかのようだ、というのが、パレンバン攻撃、カリジャチ飛行場の占領やルウイリアンの戦闘についての箇所を読みながら抱いた感想である。日本軍の思考や作戦の背後にあったもの、日本軍の上位と下位の指揮官たちの原動力となったものが、初めて詳しく研究できるようになったのであり、その結果、いまや同じ作戦に関係した敵味方両軍の報告を比べつつ統合的な分析を試みることも可能

---

<sup>1</sup> H.T. Bussemaker, *Paradise in peril. Western colonial power and Japanese expansion in South-East Asia, 1905-1941* (PhD UvA, 2001), p.757.

となった。もっとも、そのような比較統合的分析はまだ先のことになるだろう。とりあえず、この翻訳を読んで持った全般的な所見を、いくつかお話ししたい。

何より、日本軍の南方攻略計画が、実際、いかに危ういものであったかに驚いた。当初の計画では、二期にわたるわずか150日の作戦で、この広大な領域を手中に収めるというものであった<sup>2</sup>。第一期の約1ヶ月で、第14軍と第25軍がフィリピン、英領ボルネオとマラヤを占領し、それを足掛かりに、第二期のオランダ領東インド占領というようにである。その第二期には、南部スマトラ、南部ボルネオ、セレベスの飛行場をまず占領し、そこからジャワ海やジャワ島の制空権を得、続いておよそ2ヶ月のうちにジャワを占領する計画であった<sup>3</sup>。しかし、当初、第二期のジャワ攻略に必要と考えられていた3個師団のうち2個師団は第一期にも使用され、転進準備にかかる実際の期間や、そのときの状態は、わからないのである<sup>4</sup>。この計画の二つ目の危うい面は、地上作戦のテンポが敵飛行場占領に要する時間に左右されることである。制空権獲得と陸軍部隊への航空支援は、往々にして数で劣っていても、日本軍の教義における主原則であったので、飛行場を破壊していたら日本軍の計画を頓挫させていたかもしれない。最後に、部隊の再使用は兵站面で綿密な準備を要したが、それについて本書では、「精巧な時計の歯車のように関係部隊が緊密に共同する必要があった」と述べている<sup>5</sup>。

これでもまだ物足りないかのように、作戦は実質的に加速され、リスクは相当に増大していった。当初、ジャワ上陸は開戦から103日以内に達成する計画であったところ、最初に30日以上も短縮され、後に調整されて20日間の短縮となった<sup>6</sup>。既に逼迫している日程にこうした変更が繰り返され、兵站は混乱し、ジャワ作戦を深刻な危険に晒すこととなった<sup>7</sup>。ボルネオと南部スマトラの飛行場占領の見通しも、あまりに楽観的で、飛行場は、徹底的に破壊されていたり、占領後に拡張や補給を要したりと、さらなる労力を必要とした。そのため、1942年2月18日、ジャワ攻略部隊を運ぶ船団は、航空部隊が教義にあるような決定的な打撃をジャワ航空撃滅戦で与えられないうちに、ジャワへ向けて進発せざるをえなかった<sup>8</sup>。この巻では、計画が変更される経緯がそれぞれ詳しく取り上げており、協議中に交わされた意見から、読者はその変更の裏にある理由を汲み取ることができる。南方軍は、その名誉にかけて、天皇に上奏されていた150日という当初の時間枠よりも作

<sup>2</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*. War History Series (Senshi Soshō) Vol. 3. Compiled by the War History Office of the National Defense College of Japan, edited and translated by Willem Rummelink (Leiden University Press 2015), p.59.

<sup>3</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.4-9, 44-48, 56-69, 76-81, 100, 155.

<sup>4</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.267.

<sup>5</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.6.

<sup>6</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.8, 9.

<sup>7</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.133, 151.

<sup>8</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.428, 448-450.

戦日程を短縮しようとした<sup>9</sup>。加えて、連合国が南方に適時に増援を行うのを阻みたいという思惑もあった<sup>10</sup>。また最後に、大本營の戦略的論拠の一つに、連合国との戦争が予想以上の長期にわたっても、日本は南方で「不敗の態勢」を整えるというものもあった<sup>11</sup>。

南方攻略作戦が実施されるテンポがこのように計画されたため、とりもなおさず、戦略・作戦・戦術の各レベルで、敵に決定的打撃を与える攻勢・奇襲作戦が非常に重視されることになった。これは 20 世紀初頭からの日本陸軍の戦闘教義の主原則の一つで<sup>12</sup>、実際、この巻では「奇襲攻撃」および「奇襲上陸」という言葉が 83 回以上登場する。戦略レベルの奇襲作戦の究極の例は、もちろん真珠湾攻撃である。ちなみに、この攻撃計画は特に海軍から出たもので、1905 年の日本海海戦のような決定的打撃を与えた快挙を再現しようとしたものである<sup>13</sup>。フィリピンとマラヤへの同時攻撃もまた、連合国側の不意を突き、戦力を分散せざるを得ないようにすることを意図したものであった。戦術レベルにおいては、奇襲攻撃は、夜襲や複数の縦隊での敵の後衛への攻撃の形をとった<sup>14</sup>。上述の要素をすべて含んだ攻撃の典型的な例が、坂口（静夫少将）支隊のタラカン攻撃である<sup>15</sup>。

落下傘降下は奇襲攻撃としての目新しい試みで、バリクパパンとパレンバンの石油精製供給施設という戦略目標が破壊されることなく確保できるよう、それら施設への攻撃に際して計画された<sup>16</sup>。最終的に陸軍は、落下傘降下をパレンバンでのみ、飛行場を占領するために優先的に用いた。実際、飛行場は破壊されることなく日本側に占領され、また二つの精油所のうちの規模の大きい方も占領されたが、後者については、数日後に、連合国がまだ機能していた精油所をどうにか空爆によって破壊した<sup>17</sup>。パレンバン飛行場への落下傘降下は、飛行場占領がいかに重視されていたか、また、奇襲という要素がこの目標の破壊回避にどれほど重要であったかを示している。こうした戦略も、ボルネオ中央部のレド飛行場攻撃では完全に失敗した。川口（清健少将）支隊は、すっかり破壊されていた飛行場を、支隊の英領ボルネオのクチン上陸から 1 ヶ月かかってようやく占領することになる。この飛行場は南部スマトラや西部ジャワの航空撃滅戦にきわめて重要と考えられていたも

<sup>9</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.25, 26, 59.

<sup>10</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.26, 42, 276, 420, 425, 456

<sup>11</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.42.

<sup>12</sup> E.J. Drea, *Nomonhan: Japanese-Soviet tactical Combat 1939*. (Fort Leavenworth Papers, Jan. 1981), pp.17-18; see also J.A. Drea, *In the Service of the Emperor: Essays on the Imperial Japanese Army* (1998), pp.1-14.

<sup>13</sup> W. March, 'Different shades of blue. Interwar air power doctrine development. Germany and Japan.' *The Canadian Air Force Journal*, Vol. 2, No. 2 (Spring 2009), pp.21-26.

<sup>14</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.408.

<sup>15</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.174-181.

<sup>16</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.82, 355. 1 月 18 日、バリクパパンの石油貯蔵施設はすでに破壊されていた。

<sup>17</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.272-273, 282, 333-344.

ので、本書には、飛行場の修復と物資補給に8,100人近くが昼夜働いたことが記されている。この8,100人がどういう人たちかは明らかにされていない。おそらく現地民の徴用かと思われる。そうした労力をかけたにもかかわらず、飛行場はその後の日本軍の進攻の間、使用できないままであった<sup>18</sup>。他方、東海林（俊成大佐）支隊は、いわゆる「電撃」作戦で、3月1日、ジャワ北岸のエレタンに夜間上陸してから9時間後には、西部ジャワのカリジャチにある重要な軍用飛行場をまんまと占領した<sup>19</sup>。これは戦略的勝利であった。その翌日、即座にカリジャチから作戦を開始した陸軍航空隊は、植民地陸軍が企図した「大規模反撃」をいとも簡単に始末した<sup>20</sup>。その後はジャワの軍都バンドンまでの間に、わずかにチャテル峠で一線の抵抗があったのみである。

奇襲攻撃を重視するからには、日本軍の指揮官たちには臨機応変さと成功願望が大いに求められたが、こうした資質は、当然備わっていた。日本軍の戦闘教義は「創造的統率と独断専行」を求めていたのである<sup>21</sup>。これは、プロシアやドイツの陸軍の *Auftragstaktik*（「訓令戦術」）に類する指揮統制方法に合っており、ギュンター・ローテンベルク（Gunther Rothenberg）のいう「全体の戦略構想の中での分散非集中化されたイニシアチブを重視する指揮方法」であった<sup>22</sup>。それがまさに、本書の上位から下位までの一連の作戦計画や命令に見られる。最高指揮官たちが目標を定め、手段や作戦構想や日程を決め、その下位の指揮官たちが上意下達方式で、それでも常に密に協議しながら、目標をいかに実現するかを決める。軍司令部や師団司令部の立てる作戦計画は、詳細にわたるものはめったになく、下位の指揮官たちはそれぞれの考え方によってかなり自由に行動することができた<sup>23</sup>。参謀たちはこの階層的な組織の鎖を繋ぐ輪であり、ドイツ陸軍と同様に、下位の指揮官たちの作戦計画が上位の指揮官の意図に合うように注意していなければならなかった。時には自ら作戦計画を立て、その作戦を指揮することもあった<sup>24</sup>。

<sup>18</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.311, 312, 315, 451-453.

<sup>19</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.193, 507-508.

<sup>20</sup> J.J. Nortier, P. Kuijt, P.M.H. Groen, *De Japanse aanval op Java, Maart 1942* (Amsterdam, 1994), pp.121-134.

<sup>21</sup> Drea, *Nomonhan*, p.19; Kyoichi Tachikawa, 'General Yamashita and his style of leadership', in B. Bond, Kyoichi Tachikawa ed., *British and Japanese military leadership in the Far Eastern War 1941-1945* (Abingdon 2004), p.78. 「(大部隊の——筆者注) 指導にあたりては巧みに戦機を看破し、特に勇猛大胆なる決心と機動とを必要とす」

<sup>22</sup> G.E. Rothenberg, 'Moltke, Schlieffen, and the Doctrine of Strategic Envelopment', in P. Paret, *Makers of Modern Strategy from Machiavelli to the Nuclear Age* (Princeton 1986), p.296.

<sup>23</sup> たとえば、*The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.69, 81-88, 95-98, 142-145, 155, 173-176, 198, 226-233, 237-240, 245, 259, 270-273, 282-284, 288-289, 316-319, 353, 392-393, 404-409, 434, 460-467, 538-540, 549, 551. Compare: Faris R. Kirkland, 'Combat Leadership Styles: Empowerment versus Authoritarianism', *Parameters* (December 1990), pp.62, 65-66.

<sup>24</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.102, 171, 194, 202, 205, 208, 240, 251, 272, 283, 345, 355, 369, 465; compare Rothenberg, 'Moltke', p.301.

今日、「mission commad」として知られるこの指揮方法にも、難点がないわけではない。時に、指揮官が目標を誤解していたこともあった。例えば、1941年川口少将は、クリスマス日にクチンを占領した後、レド飛行場に即座に進出する必要性を理解していなかったようである。サイゴンの南方軍総司令部は、その目標について数回念を押す必要があった。雨季、壊れた橋、膝まで泥に埋まってしまって通れない道など、川口少将の遅延の説明に南方軍総司令部は聞く耳を持たず、川口少将が徴用した帆船と動力船で間に合わせの船隊を作り、海岸に沿って400キロ離れたパマンカットに向けて出発した後、ようやくサイゴンの総司令部の態度が和らぐことになる<sup>25</sup>。

第16軍司令官今村均中將は、ジャワ作戦のバンタム湾での上陸作戦中に、おそらく「同士討ち」で数隻が被雷し、隷下の指揮官たちの掌握に苦勞することになった<sup>26</sup>。通信機器をほぼすべて失い、何日も連絡がとれない状態となるが、今村軍司令官は、上陸地点間相互の距離の遠大さと広範囲に散在する攻撃目標から、4つのグループに分かれている攻略部隊には、より自律性を持たせる必要が生じるであろうことを見越していた。師団長や支隊長たちが独断に走りすぎないように、具体的な作戦要領を示し、「熱心な参謀」を送り込んでいた<sup>27</sup>。それでも自らの計画を立てた指揮官もいた。たとえば、東部ジャワでは、第48師団長（土橋勇逸中將）はブランタス河畔で決定的打撃を与えようと狙いを定めたが、安部孝一少将指揮下の支隊が素早く前進した結果、師団長は後方で小戦を交えただけとなった<sup>28</sup>。しかし、最も明確な例は、もちろん東海林大佐が指揮した支隊の前進であろう。今村中將は東海林大佐との特別な絆から、大佐とは「以心伝心」であろうと、意図して東海林大佐を選んでいった<sup>29</sup>。今村中將の作戦要領とは裏腹に、3月4日、東海林大佐は2個大隊で単独でバンドンに攻撃を仕掛ける決意をした。その時点までに遭った抵抗はさしたる印象もなく、少なくともほかの聯隊長たちがパレンバンで収めた成功に引けを取りたくなかったのである<sup>30</sup>。第3飛行団長（遠藤三郎少将）に支援の用意があると知り、参謀のより慎重な意見には、なおのこと耳を貸さなかった<sup>31</sup>。翌日、東海林大佐が今村中將に進捗を連絡した時、今村中將はその動きを作戦計画からの危険な逸脱と見たが、臆病と非難されることがないように、南方軍へは、またとない機会であると伝えている<sup>32</sup>。これら一連の出来事は、独断をもって行動することと、無謀な行動のバランスの微妙さを表している。

---

<sup>25</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.197-203, 220.

<sup>26</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.471.

<sup>27</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.460.

<sup>28</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.549, 558-563.

<sup>29</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.251.

<sup>30</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.512, 513, 516.

<sup>31</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.518, 521.

<sup>32</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.498-500, 502-503.

その結果の勝ち負けで、独自行動が賞賛されるか貶されるかが決まる。ついでながら、この例は、日本陸軍において、名誉、勇気、決意などの伝統的な武道の価値観の意義が衰えていないことを示している<sup>33</sup>。

着目点として最後に焦点を当てたいのは、ある面で先進的な日本陸軍の性質である。ほかの歴史研究者たちは、日本陸軍は、実際は重火器もなく軽戦車もわずかにあるだけの、ズック靴と自転車の軽装備の歩兵軍だとして、その比較的古い性質を強調してきた<sup>34</sup>。確かに日本陸軍は、第一次世界大戦以前の連合国軍と同じく、攻勢作戦を重視した教義を持ち続けていたが、それ以外の面では、驚くほど近代적であった。他の大国とは異なり、日本は兩大戦間に陸上および海上での航空機の価値と可能性を見出していた。海軍は戦艦に代わって空母を中心的役割に据える教義を発展させ<sup>35</sup>、陸軍航空はドイツと同じように、制空と地上作戦における戦術的航空支援という「うまくいく」教義を進展させた。1940年春のドイツの成功例に続いた落下傘部隊の活用も近代적である<sup>36</sup>。パレンバンへの落下傘降下が完全に成功だったわけではないことは、そのような降下が近代적ではあっても、実施が難しく失敗しやすいことを明らかに示している。近代性として注目してもらいたい最後の点は、サイゴンの南方軍が実施した「謀略放送」である。3月1日から9日まで行われたこのラジオ放送は大量の偽情報を生み、既に混沌としていたオランダ領東インド王国陸軍(KNIL)の防衛態勢をさらに崩壊させた。3月8日のKNILの停戦——あるいは降伏——命令をめぐる混乱のものは、このラジオ放送に見られる<sup>37</sup>。

この最後に挙げた項目こそが、再度、この素晴らしい刊行物の強みを例示するもので、今日まで文字通り一方的にしか見ることでできなかった軍事作戦に関する大量の詳細な情報である。以上、述べたとおり、この重要な原典を用いて、双方の情報を細かに比較しまとめることができるのであり、これにより、インドネシアの島々におけるこの戦争に関心を持つ誰もが、これまでよりも偏りのない分析を行う機会に恵まれることになる。したがって、「戦史叢書」のこの巻の翻訳は、日本とオランダとインドネシアを包括した全体の戦争経験の史料を編纂していくための、重要な一歩を象徴するものなのである。

(オランダ軍事史研究所)

<sup>33</sup> Drea, *Nomonhan*, p.90.

<sup>34</sup> Bussemaker, *Paradise in peril*, p.746; Drea, *Nomonhan*, p.90.

<sup>35</sup> March, 'Different shades of blue', pp.25-26.

<sup>36</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, p.23.

<sup>37</sup> *The Invasion of the Dutch East Indies*, pp.576-585.